必然の僕ら

空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
必然の僕ら

【Ｎコード】
Ｎ１３４６Ｎ

【作者名】
空

【あらすじ】
僕は天国に住むヒノアラシのダイキ！
好きな事はねころがって空を見る事！！

あれ？これじゃあ自己紹介か。

ともかくこのストーリーは僕、ダイキと友達のトウラ、カナの決意と友情のお話なんだよな。

あ、ついでに言うと「ナーフフィア～三びきの勇者たち」の外伝らしいけどそれを見なくても大丈夫だから！

よかったら拝見よろしく！

第一話　衝撃（前書き）

このストーリーはナーフフィア～三びきの勇者たち～の外伝です。
でもそちらをみなくともストーリーの内容はちゃんと分かりますの
でご安心ください。

第一話　衝撃

僕は、どこにでもいる平凡のヒノアラシ！

名前は「ダイキ」っていうんだ。

元は人間なんだけどいつの間にかポケモンの世界に来てしまっていた。そして今は無事、天国に戻ってきているんだ。

「きもちいーなあー。」

ふわああと大きなあくびをして草むらに寝転がり、どこまでも澄んでいる空を見上げていると、「ダイキー！」と友達の声が聞こえた。

僕は起き上りその方向を見ると、やっぱり友達のコリンク、名前は「トウラ」が駆けてきた。

でも顔は半泣きだ。あい変わらず泣き虫だなあ・・・。そう思いつつ息切れ切れできたトウラに声をかけた。

「どうしたんだよ、トウラ。」

すると、トウラはバッと今来た方向を指差し言う。

「カナがーー！」

ああ、カナかぁ。僕は苦笑いを浮かべながら「大丈夫だよ。」とトウラをなだめながら納得させてえいるとそのカナが追いかけてきた。

「トウラー！まっちなさぁーいっ。」

そのカナは人間の女の子。髪はポニーテールをしていて緑色、上は水色のTシャツ、下は短パンをはいている。

カナも僕と同じで人間の住む世界から来たんだ、でもポケモンになったのは僕だけでカナはならなかったんだけど。

そして、わけあって今僕らと一緒にポケモン霊界に来ているってわけなんだ。

カナは僕達の所につくと「あれ？トウラは？」と僕に聞いてきた。トウラは実は『あなをほる』で地中に潜っていたからカナに見つかるはずがない。

「さあ、どこでしょう？」

僕はとぼけたようにカナから目を離し、口笛を吹く。

ユーは「うううーー！」と唸り声をあげ、僕のまわりをじろじろと見まわっている内に

「白状しなさーーいっ！！」

とついに怒ってしまった。体から少し黒いオーラが出てるのが分かる。

これはやばい！

「カナ！落ち着けよ。ほらトウラ出てこいよ。」
僕は焦って一人と一匹に声をかけた。するとカナが落ち着く前にトウラが出てきて
「ごめん。カナ」
とあやまった。カナはまだ顔をしかめっ面にさせている。このままじゃカナが、危ない！
ん？何が危ないって？それは天国では悪い思いをあまりにもだしすぎるとここと合わなくなって地獄に落ちてしまうんだ。
カナはいつも感情が暴走しちゃうからしょっちゅう落ちるんだよねー。
そのたびに僕らが助けに行くんだけど。
そうこうしている内にカナの黒いオーラは少しずつ薄れていき、もとのカナに戻る。（よかったー）
「・・・・・ごめんっ！トウラ。うちが悪かったわ！」
そして落ち着いたカナが反省してくれてトウラに頭を下げる。トウラはカナを見上げて「いいよ！」と笑顔で答えた。
それから、仲直りした僕らは地上の様子を見るためにある建物に向った。
その建物は未来の建物のようなカッコイイ全体が頑丈なガラスで覆

われている「地上望遠鏡」みたいな所だ。
その中に入ると受付のトゲキッスのおねえさんがニッコリと笑って僕らをむかえてくれた。
「あの、地上の様子を見に来ました！」
とトウラが言うとそのお姉さんは「では、こちらへ」と左端のドアの方を向いた。
　僕とトウラは先に中に入る、中はおおきな透明のモニターと三つの気持ちよさそうな椅子がそのモニターの前に置いてあった。
そして、話をしながら待っていると、カナが地上の様子を見たい理由を書いてくれてきて、あとから部屋に入って来た。ドアはもちろん透明で自動ドアだ。
（ありがとう、カナ）
心の中でカナに感謝するとカナは「どういたしまして。」とかすかに微笑み空いている右端の席に座る。
「じゃ、見るよ。」
トウラがポチと爪でリモコンをおすと、
ブイイン
と音をたて、モニターに懐かしい地上が映った。でも、なにかがおかしい。そんな感覚を覚えながらモニターを僕らはじっと見つめる。
ウイン、ウイン、どんどん場面が変わっていく。

ワイン畑、のどかな町、山中の村。
そして、ぼろぼろになっているパチリス?!
「ちょ、ちょいストップ!」
どんどん場面を変えていたトウラを制する。
「う、うん。」
トウラはリモコンをモニターの下にある箱に戻す。
「ねえ、うちさ薄々きずいてたんだけどやっぱり今の地上のほうの
「ナーフフィア」は何か良からぬ事が起きているんだわ・・・・。」
カナは真剣なまなざしでじっとモニターを睨む。僕も頷いて
「それは僕もきずいてた。地上でいったい何が起こったんだろう?」
ナーフフィア星は戦争や争いごとなんて今まで絶対起こったことない平和な星、なんだけど・・・・。
なのに、どうしてこんなヒドイありさまになっているポケモンが?
そう思いながら(でも思いは二ひきに聞こえているけど)僕はぼろぼろになっているパチリスをじっと見ていた。
パチリスはやがて崩れた町の中に入る、そしてそのパチリスの前に待ち伏せしていたのは今まで見た事のない凶暴そうなヘルガ―たちだった。

「おわりっ！」

ブチン！

その場面でカナが突然モニターをけした。

でも、僕らはその行為に何も言わなかった。それはさっきのポケモンがどうなるかなんて見たくなかったからだ。

だからむしろ消してくれてホッとした。

「なんだったんだろうね。さっきの映像。」

トウラが深刻な顔で言う。

「うん、あんなの一度も見たことなかった。」

僕も頷きながら言った。

そうだ、思いついた！！

そして僕はいつもは細い目を精一杯ひらいて、興奮しながらトウラ、カナにあることを話したんだ。

つづく！

第一話　衝撃（後書き）

よかったらこのストーリーの感想お願いします！！

第二話　はじまりの間（前書き）

今回はアルセウスに会いに行きます！

第二話　はじまりの間

「ええっ、アルセウスの所に行くの？！」

トウラが驚いてこっちを見た。僕は強気な顔で「うん！」と頷く。

「でもアルセウスのいるはじまりの間って僕達、ささやかの間に住むポケモンは次元が違いすぎるからいけないんじゃ・・・・。」

とトラウが言う。確かにそれは常識だけど実は僕秘密のワープゾーン見つけちゃったんだよねー。

「なにそれ！どこにあるのよ、教えなさいよぅ。」

「僕も知りたい！」

カナとトウラが僕にズイイ！と近ずいてきた。

「いいよ、それじゃあ僕についてこいよ。」

僕はすたすたと歩いて行く、その後をトウラとカナがついて行った。

・・・・アルセウスに教えてもらおう。今、地上で何が起こっているのかを！

しばらく涼しげで神秘的な森の中を進んでいると少し開けた広場

にでた。その真ん中には僕が言っていた眩しく白色に光っている円型のワープゾーンがある。

「ここかあ〜。すっごーいっ」

トウラは感心している、僕らはそのワープゾーンに近ずいて行くと「じゃ、お先にしつれーい！」と先にカナがワープゾーンに入って行ってしまった。

「おいっ、待てよ！」

そして、トウラと一緒にワープゾーンへ入ると、辺りが物凄くまぶしくて僕はもともと細い目をもっと細めて耐える。でも、目はつぶらなかった、移動する瞬間が見たかったからだ。

辺りはどこまでも真っ白、そう思っているといつの間にか僕らは今までよりももっと明るくまぶしい場所にいたんだ。

隣を見るとよかったー。トウラ、カナが真っすぐ前を見つめている。

「なあ、トウラ。」

小声で話しかけるとトウラはきずいてくれて「何？」と小声で答えてくれる。

「はじまりの間はここなんだ。」

「そうなの？なんか周りが眩しすぎて耐えられないんだけど。」

トウラは腕で顔を覆うしぐさをすると僕は笑って言う。

「それがはじまりの間の証拠さ。」

『ダイキ、トウラ、カナ。お前たちは何をしに来たのだ。』

眩しくて良く見えなかったけど今まで黙っていたアルセウスが僕達に聞いてきた。僕は聞きたかった事を言う。

「今、地上で何がおこっているんだ？僕はそれが知りたくて来た。」

僕が堂々と敬語も使わずに（だってめんどくさいじゃん）聞くと、アルセウスはしばらくその一人と二ひきをじっと見ていると、

「いいだろう君達なら大丈夫そうだ、教えてやろう今、地上で何が起こっているのかを。」

そして、語りはじめる。

僕は嬉しさと緊張を感じながら、そのアルセウスの言葉に耳を傾けた。

第三話　暗雲期（前書き）

今回はナーフフィアの世界の歴史みたいなのです。裏話などに興味がある人や暇な人などにお勧めです。

ー居眠り注意！ー

第三話　暗雲期

「長くなると思うから覚悟して聞いてほしい。」
アルセウスはそう言って語りだした。

遥か、一億年以上昔のこと・・・。
偉大なる神に頼まれ、アルセウス神はポケモンの世界すべてを創造した。
そして、ナーフフィアの至高神につき、その星の神、そしてポケモン達をつくりだしたのだ。

やがて、地上を作りそこにポケモンたちは修行をしに降りて行く。地上は時を重ねるうちに緑があふれ、ポケモン達は自然と共存しながら生きていた。もちろん、科学技術もどんどん発展していく。

平和で戦争や争いが一つもおこらないそんな星だった。しかし、本当は裏の歴史がある。
それは、ゼクロムというポケモンが世界征服をしようとしているさなか、アルセウスは緊急に自分の化身を送り出し何とか食い止めたのだ。

この古い古い歴史は地上からはもう消え去り、それからは戦争も争いもおこらないのんびりとした平和な星だった。

しかし、レンア国の王が変わりグラという世界征服をもくろむ極悪人がなぜか王に着くと、世界は一変した。

レンア国は元は小さい普通の国だったのだがグラの独裁で次々と周りの国を襲っていき属国にしていく、当然、世界のほとんどの国

が危機を感じ、防衛化や軍事化をすすめた。

そのころ、光の国ラウー国が悪の帝国と化したレンア国を抑えようとしていた。が、どうにも止まらずアルセウスは一匹のホウオウをラウー国に送ったのだ。

やがて、ホウオウが王につくとレンア国は少しおさまっていた。でも裏では侵略はとまらない、まだ悪の帝国は動き続けている。

暗雲期・・・・それが今の状況だった。

第三話　暗雲期（後書き）

ここまで読んで下さった人、どうもありがとうございました！！！
少し編集をしました！

第四話　決意

暗雲期、それが今の地上の状況なのか。
僕は今までにない大きな衝撃を受けていた・・・・。
そして、同時に僕もホウオウみたいにこの暗雲期を払う役目をしたい！と思ったんだ。すると、トウラが
「あのアルセウス様！この暗雲期はどうやったら終わるんですか？！」
と叫ぶように聞いた。カナも「うちも知りたいわ。」とアルセウスに言う。
眩しすぎてよく姿が見えないアルセウスは、
「それは、悪の帝国のボスを倒す事しか方法は無い。と思うのだが、しかし・・・・。」
とそこまで言うと考え込んでしまった。
僕はもう待ち切れず次の瞬間には
「僕達がその悪の帝国のボスを倒してもいいか？」
と真っすぐと目を細めずにアルセウスの方を向き、言った。
「ちょ、何言ってんのよ！ダイキ。」
カナが僕に襲いかかろうとしようとしたが、アルセウスの視線を感じおとなしくなり、「仕方ないからうちも参加してあげるわ」
とふてくされながらも賛成してくれた。

「トウラ、お前もやるんだろう？」
ボーとしていた所にアルセウスの声が響いたのでトウラはハッとなって「はい！」と答える。
トウラも内心はきっと「なにか役に立ちたい！」って思っているはずだよな。
「では、お前達の意思が本当かどうか、そして友情の強さ。実力。この三つを試す試練を行う、それに合格なら・・・「その使命をもって地上に生まれる事が出来るのね。」
とアルセウスが言うのをカナが自信満々に途中で割り込むように言った。
なーんだ、カナもやる気があるじゃないか
「さよう。では、今から試練を開始する！準備はいいな！」
「「「はい！！」」」
僕らは力を込め、元気よく返事をした。
どんなしれんもかかってこい！そう決意しながら。

第四話　決意（後書き）

すんません、最後がくさくなってしまいました――。

ミウロ「あれ？空、何書いてんの？」

はっ、お前はでてくるなぁー！

第5話　必然の僕ら（前書き）

ものすごく久しぶりのさいしんだぁー
そしてこれが最終話です！
しれんはぶっ飛ばしました。（たのしみしていた人（絶対いないと思う！）ごめんなさい・・・。）
では、ひまでしたらどうぞ―

第5話　必然の僕ら

「それでは、行って来い！」

眩しく輝くアルセウスはその光をもっと強める。僕は耐えきれずギュッと目をつぶった。

そのあとは、激闘の連続だった。

全員で力を合わせてぼろぼろの橋を渡ったりして、心の面でも色々と考えが揺らいだ。でも、それはカナとトラウも一緒だ、きっとこいつらは一緒に行ってくれる！と信じて頑張った。

最後の凶暴なポケモンオーダイルとのバトルでは何度もくじけそうになった、でも僕らはあきらめない！

と、ぼろぼろになりながらもついに最後の試練を打ち破ったんだ！

■■■■■■■■■■■■■そ・し・て■■■■■■■■■■■■■■■■■■

気がつくと、僕ら一人と2ひきはドームみたいな大きな透明の建物の前にいた。

手にはアルセウスからのＯＫ！と書かれた紙と決意書と書かれた3人分の紙を持っている。

きっとこの決意書に色々とかくんだな。と納得していたらカナが僕の腕とトウラのしっぽをつかむ。

「さ、ＯＫももらったことだし、さっさと生まれ変わるわよー！」

ドオオオ！、ウィーン

「うわああ！」

「やめてー！」

地響きと煙があがり、僕たちはその建物に入っていったんだ。

生まれ変わるための装置に入る直前で並んでいる僕とトウラ、カナは色々なやつと会い「地上で会おう！」そう言う事を言ってた。

イーブイのフウ、ビブラーバのイグザ、ブイゼルのタクとその姉のフローゼルのマイ・・・・、

数え切れないほどの奴と約束して会っては離れ会っては離れと繰り返している内、ついに僕らの番がもう少しで来そうな時。

「いよいよ、だね。」

少しさびしそうにトウラがつぶやいた。

「うん！ついに出れるのね、地上に！」

生前の事もあり、少し厳しめらしいカナは緊張で顔がこわばっている。

「大丈夫だよ！また会えるんだからさ、その時はよろしくな。トウ

ラ、カナ。」

僕は思いっきりの笑顔でトウラとカナを交互に見た。

トウラとカナは笑みを浮かべ、うんと力ず良くうなずく。

「がんばろうね！ダイキ！」

「地上でもうちのおいしーい料理とお菓子を食べさせてあげるんだから！」

「「それは・・・」」

カナの一言で2ひきがおじたらえていた時、ついに僕らの受付が来て緊張感いっぱいで一歩、前に踏み出したんだ。

僕は、あの決意書にはなんて書いたっけ・・・・。ああ、あれかぁ○○○・・だったな。

ちゃんとあいつらと会えるかなあ、なんか不安になって来た。でも、何とか・・・なる・・・よ、な。

薄れて行く意識の中、装置の中で目をつぶった。

――――――――――――きっとまた、めぐり会える。

だって、僕らは約束をしたから「また会おう」って

だから地上での僕たちの出会いは

きっといや、ぜったい

必然の僕ら

なんだ！

必然の僕ら　ＥＮＤ

第5話　必然の僕ら（後書き）

ここまで、読んで下さった方、ありがとうございます！
読んで下さるだけでもうれしいです！！

この3人は地上でもっと過酷なしれんが待ち受けていると思います。

そこは作者しだいですが・・・。

では、ナーフフィアのほうも続けてよろしくおねがいします！

あとがき

これで、ナーフフィア外伝「必然の僕ら」を終了いたします。
読んで下さった方々、ありがとうございました！

ミウロ「あれ？空、なにやってんだ？」
エル「なんかの映画かなんかやってたの？」
ユー「バカ話とかそんなんじゃないの？」

いっきに3びきから質問攻めの空。焦りながら
「なにやってたかは、自分で考えて！」
そう言ってやると3びきはわいわいと語りだす。

絶対あいつらには言えない！

そう自分で思っていた。

最後に

どうやら２００文字じゃないと投稿できないらしいのでここから先は気にしないでください。

時は、ｍいやダイキとトウラ、カナが天国にいたころにもどる。

ダイキ「ふあああああ、なんか僕も他人に役立つ事なにかできないのかなー。」

あくびをしながらそう言っていると、トウラが来る。

トウラ「今から剣士たちが地獄に行くんだって！僕たちも行ってみようよ！」

ダイキ「なに？！行こう！さっそく行こう！」

飛び起きたダイキはトウラの腕をつかみ走り出した。

カナ「あはははは、なに？これ。」

カナは笑った、なぜかというと

変なおもちゃを見て笑ったのだった。

変なチビ話　終了　（なんじゃ、こりゃ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1346n/

必然の僕ら

2010年10月10日15時15分発行